

第30期目録委員会記録 No.4

第4回委員会

日時：2005年7月16日（土）14時～17時

場所：日本図書館協会5階会議室

出席：永田委員長，白石，原井，平田，古川，増井，茂出木，横山

<事務局>磯部

[配付資料]

- 1．用語解説 [案] (2ページ-A4，増井委員)
- 2．漢籍、和古書について (1ページ-A4，増井委員)
- 3．人名に関する標目に係る方針について [案] [国立国会図書館] 書誌部(5ページ-A4，横山委員)
- 4．[AACR3 Section A2とAACR2 2004 chap.12の対応関係](2ページ-A4，原井委員)
- 5．「目録」を考えるためのメモ (1ページ-A4，永田委員長)
- 6．第30期第3回目録委員会記録 (3ページ-A4，事務局)

[事務連絡]

出版するNCR1987R2追加修正のタイトルのうち第2章のタイトル案「和古書・漢籍用増補版」について、第2章は現代本の規定から例を省いているので増補版とは言えないのはいか、という疑問が出されたが、「和古書・漢籍用」と限定していることで理解を得られるとの判断で原案どおり進めることとなった。

[検討・報告事項]

1．用語解説案について

増井委員から、資料1および2について説明があり、討議が行われた結果、次のように決定した。

- ・ 「和古書」中の「刊行された」を「書写・刊行された」に改める。
- ・ 「和古書」の末尾に「本規則では、刊本は第2章、写本は第3章で扱う。」の一文を加える。
- ・ 案には用語間の相互参照があるが、既存の用語解説の参照形式である一方参照に揃えるため削除する。相互参照の方式は今後のNCRを検討する際の参考とする。

2．国立国会図書館の「人名に関する標目に係る方針(案)」について

横山委員から、資料3について説明があり、次のような意見が出された。

- ・ 同姓同名については、生年や職業以外にも活躍している分野や領域などにより極力同定してほしいという要請があるだろう。
- ・ 生年や専門分野が採用できない場合の暫定的付記事項として、初出資料の出版年を付すとなっているが、その有用性には疑問がある。暫定的付記事項の代わりに同名異人の存在を示す印を付けることも考えられるのではないか。
- ・ 没年がわかるということは個人情報との関わりがなくなるわけだから、没年の付記はぜひ積極的に行っていただきたい。
- ・ 1人の人が2以上の名前を使っている場合にそれらを相互に関係付けてはいけないという意見があるが、それはどう扱うのか。
 - 公刊物でわかればよしとした。

同案は今後細部の調整を経て9月から適用を開始し、HP上で公表する予定とのことである。

3 . AACR3について

原井委員から資料4について、横山委員からsection A3について説明があり、討議が行われた。

- ・ A2は変化する資料についてのセクションで、AACR2の第12章と対応する項目が多い
- ・ マルチパート関係は新規の項目である。
- ・ 逐次刊行物の順序表示はここではなくA1にある。
- ・ 順序表示は、対象を同時に刊行されるマルチパートにまで広げたためA2ではなくA1に置かれている。
- ・ A2とA3はほぼ対応する項目立てになっている。A3にないのは、逐次刊行物と多巻ものである。
- ・ A2もA3もそこを見るだけでは書誌作成ができないという使い勝手の悪さがある。
- ・ A1,A2,A3という構成にした必然性が読み取れない。
- ・ できるだけ総則(A1)にまとめ、そこに入らないものをA2とA3に分けたのだろうと理屈ではわかるが、この程度の量ならA1にまとめてもよかったのではないか。
- ・ AACR2でいったん逐次刊行物と更新資料をまとめたのに、AACR3では逐次刊行物と多巻ものをまとめている。新しい区分原理を出すなら合理的説明をすべきだろう。
- ・ A2のマルチパートは時間性を含むマルチパートであるのに対し、更新資料は時間性は有するがマルチパートではない。
- ・ 上下巻が同時に発行される場合と別々に発行される場合とで扱いが変わるのか等、論理的整合性を重視したために、実際の作業上不明な点がいろいろありそうである。

次回委員会では、Section BおよびCについて検討することになった。

4. 今後の「目録」を考える方向性について

永田委員長から資料5について説明があり、討議が行われた。

- ・ 利用者の検索行動が、OPACからgoogleのような方法に変化している。googleを構造的に検索する方法を明らかにし、それに合ったメタデータを作成していくことが必要になるのではないか。
- ・ 従来図書館では当たり前だった図書と雑誌の区別が意味を成さなくなる。
- ・ AACR3のA2,A3は「もの」の管理に相当する。利用者には不要でも図書館としては必要だろう。
- ・ 大学図書館では、電子ジャーナルへの移行により「もの」の管理の要素が減少している。
- ・ 学術雑誌以外はまだアーカイピングが進んでいないが、いずれは同じ状況になるのではないか。
- ・ 「もの」の管理のためではなく利用者検索のための目録規則、利用者が検索する単位に即したデータの構築を考えていくことになるのだろう。
- ・ 電子ジャーナルの動向を考えるとメタデータの役割は少なくなるのかもしれない。それでもアーカイブされた情報に対して、それがどういうものなのかを示すインディケータを付与し、情報相互の関係を示すメタデータは必要であろう。
- ・ 横断検索機能を持つソフトにより、電子ジャーナル、フルテキスト、OPAC等を一括で検索できるようになると、OPACの細かい機能は不要になる。フルテキストに簡単にアクセスできる一方で、OPACデータは書誌レコードしか見えないという状況がある。
- ・ 学術情報を扱う大学図書館と一般資料を扱う公共図書館では、必要とされる機能レベルがかなり異なるのではないか。
- ・ 要は、これからの目録の対象情報、そのコンテキストやメディアがどうなるかを考えて、目録規則改訂の道筋を考えていくということか。

次回委員会では、目録規則改訂の目標設定に向けてさらに検討することになった。

次回以降の委員会の予定

9月17日(土)

10月15日(土)

以上